

# あすの淡海

自然と人との共生をめざして

VOL.

53

2026 春号



新たなヨシ群落保全プロジェクト

# 新たなヨシ群落保全プロジェクト

## ～ヨシ群落の「むかし」と「いま」から「これから」を考える～

琵琶湖や周辺のヨシ群落の面積は1953年に481haありましたが、開発や湖岸堤の建設などが進んだことにより、1992年には384haまで減少しました。その後、ヨシ帯造成事業や保全活動が活発に行われ、2022年には444haまで回復しています。しかし、近年、ヨシ需要の低迷やヨシ業者の減少・高齢化などによりヨシ刈りが十分に行われなくなり、ヤナギなどによる森林化が進むとともに、外来植物の侵入なども問題になっています。

一方、企業においては環境貢献やSDGsの目標達成に向け、ヨシ保全活動への関心が高まってきており、大規模なヨシ刈りイベントなども見られるようになってきました。しかし、活動が一過性になり、参加者による目的や成果の共有が不十分になりがちであるという意見も聞かれます。

こうした状況を踏まえて、淡海環境保全財団は、令和7年度から「新たなヨシ群落保全プロジェクト」を展開しています。

### プロジェクトのねらい

県内のヨシ群落について古い文献などを調べてみると、ヨシ群落の成り立ち、ヨシの利用、ヨシと人々の暮らしや生業との関わりには地域ごとに特徴があります。また、ヨシに対する人々の関心や考え方も多様であることがわかってきました。ヨシ群落にはそれぞれ独自の歴史的背景や文化があり、それらが現在のヨシ群落の状況を反映していると考えられます。

そこで本プロジェクトでは、① 地域に着目し、地域ごとにきめ細かな整備を行う、② ヨシ群落の「むかし」と「いま」についての情報を収集し、「これから」を考える、③ 多様な主体が参画してヨシ群落のあるべき姿を描き、その実現に向かって共に行動する、の3点をねらいとしています。

当財団では長浜市湖北町老江の湖岸をフィールドとし、参加者を募集して3つのステージにより約半年にわたって活動しました。

### 第1、第2ステージで学びと議論、第3ステージで実践活動

第1ステージ（5月）では、「ヨシ群落のむかし」として、この地域のヨシ群落の成り立ちやヨシの利用の歴史について学びました（本誌4ページ「淡海ヨシ紀行 第7回湖北（長浜市）」参照）。また、「ヨシ群落のいま」として、ヨシの特性やヨシ群落の生態を学ぶとともに、コイ科の魚が水草に産卵している状況を確認しました。それらを踏まえて、ワークショップでは「ヨシ群落のこれから」として、あるべき姿について議論しました。

また、第2ステージ（6月）では、前回の議論を踏まえてヨシ群落の整備方針を検討するとともに、ヨシポット苗づくりを体験しました。



ヨシ刈りの実践



すだれ編み体験



ヨシ群落の生態の学習



ワークショップ

第3ステージ(12月)では第1、第2ステージで学び、議論して立てた整方針に基づき、現地で実際にヨシ刈りやヨシ苗植えを行いました。また、午後からは湖北体育館で午前中に刈り取ったヨシを使ってすだれ編みを体験しました。

### ヨシ群落保全手法の確立を目指して

今回のプロジェクトは初めての試みであり、試行錯誤しながらの取組であったことから、繁殖力の強い雑草への対応、ヨシ苗の植栽適地の判定、ドローン等を活用した調査やモニタリング手法の確立などが課題として明らかになりました。また、企業や多様な主体が参加しやすい仕組み作りも必要になっています。

今後はプロジェクトをさらに進化させ、ヨシ群落の保全手法の確立を目指していきたいと考えています。

表紙写真 「新たなヨシ群落保全プロジェクト」におけるヨシ刈り

# この人に聞く



京都大学大学院地球環境学  
准教授

ふかまち かつえ  
深町 加津枝 さん

琵琶湖や内湖のヨシ群落は、滋賀に生まれ育った人々にとって郷土の原風景であると言われます。原風景とは人々の心の奥にある原初の風景であり、遊び、暮らし、生業などの体験や記憶に基づくものです。原風景としての自然環境を保全・再生していくためには、人々が自然とどのように向き合い、関わってきたのかを明らかにしていくことが重要です。

京都大学 准教授の深町加津枝さんは、人が自然に働きかけることによって景観や生態系がどのように変化するかについての研究を重ねられ、その範囲は生活、文化、防災、教育をはじめ様々な分野に及んでいます。また、その研究成果は行政施策や地域の活性化にも活かされています。

今回は京都大学吉田キャンパスにある深町さんの研究室を訪ね、ヨシ群落の保全や利用についてお話を伺いました。

## ー現在、どのような研究に取り組まれていますか。

**深町さん** 一つは、総合地球環境学研究所のSATOCONNプロジェクト、日本とヨーロッパの国際プロジェクトで、里山で失われた自然と人との関りをもう一度つないでいこうという研究です。滋賀県では比良と仰木をフィールドに、里山で荒廃した水田や水系のネットワークを修復する仕組みづくりを地域の方々と連携して進めています。また、湖西地域とポルトガルの里山では、人と樹木との関わりについての共同研究を行っています。

もう一つは、Eco-DRRや雨庭などのグリーンインフラに関する研究です。Eco-DRRというのは、先人たちが長年の歴史の中で積み重ねてきた知恵や工夫を防災・減災に活かそうとする考え方で、また、環境省の生物多様性に関するプロジェクトの中で、三陸海岸や北陸、近畿地方などで調査しています。滋賀県では地域住民からヒアリングを行い、食文化や祭りなどの伝統文化と生物多様性との関係を調べています。

## ー琵琶湖や内湖をフィールドに、どのような調査・研究をされていますか。

**深町さん** 伊庭内湖の重要文化的景観に関して、内湖のヨシや周辺の土地利用と鳥類の関係を調べました。伊庭は淡水魚の種類が豊富ですが、それは内湖、水田、水路など多様な生息環境が水系でつながっているからだと思います。豊かな自然に人が関与することで多様な生きものの生息環境が創出され、文化的な要素と生態的な要素がコンパクトにまとまって景観を形成しています。そこに重要文化的景観としての価値があると思います。

また、比良山麓の南小松沼では、内湖に関心を持つ人が少なく、環境も悪化しつつあるという現状認識から、まずは、子どもたちがタライ船に乗って内湖を観察するプログラムを試みました。2005年に地域の多様な関係者を構成員とする「NPO法人比良の里人」、2022年に「南小松沼（内湖）自然再生協議会」を設立しました。現状だけでなく、過去の自然、暮らし、遊びなどについても調査を行う中で、地元の方々が地域の良さを見直すきっかけになりました。

## ーヨシに関する調査では、具体的にどのようなことがわかってきましたか。

**深町さん** 西の湖の安土町側が重要文化的景観に追加指定された際、植生調査をしました。何年前に刈り取りや火入れをしたかなどを調べ、手入れの仕方によって植生がどう変わるかを詳しく見ました。その結果、手入れをやめると植生が大きく変わることを実感しました。データに基づく調査結果は説得力があります。

また、文化的側面からも調査を行いました。中でも、近江八幡市のヨシ松明祭りは数も多く、地域性もあり素晴らしいですね。祭りが生物多様性の保全や地域のコミュニティ創出にも役立っています。このような祭りからも、生物と文化をうまくつなぎ生物文化多様性として進めていく視点が重要であることがわかります。

## ー琵琶湖と周辺のヨシ群落の現状と課題、および今後必要な取組についてお聞かせください。

**深町さん** ヨシ群落の面積が今後、開発などで大きく減少することはないと思います。しかし、ヨシ群落の生態系や人との関わりといった質的な部分は劇的に悪化している感じがします。ヨシ松明祭りにしてもヨシ葺屋根にしても、後継者がいない、生業として厳しいということでやめていく人が増えています。まさに今が過渡期で、ここで頑張れるかどうかでこの先が大きく変わるような気がします。

新しい発想や技術で工業的にヨシを利用しようという動きに期待しています。一方で、伝統的なヨシの使い方というのは、単に材料として利用するだけではなく、その過程でいろんな人を巻き込みますし、地域の文化や景観にも深く関わっています。そういう大切さを再認識し、新たな利用と伝統的な利用を両輪で進めていくことが大事だと思います。

## ー財団の「淡海ヨシみらいフォーラム」にもご参加いただいていますが、財団には何を期待されますか。

**深町さん** ヨシに興味を持ち、課題に対して何か役立ちたいという企業はたくさんあると思います。しかし、何から手を付ければ良いのかがわからない、一企業では動きにくいという話を聞きます。つなぎ役がいれば動けるといって企業も多いと思います。

財団は公的な役割も担いながら柔軟に動ける立場であり、コーディネーターとしての役割を期待します。

## ー今後、どのような研究に取り組んでいこうとお考えですか。

**深町さん** 今、私が関心を持っているのは、生態系や環境の価値と地域の文化や歴史とのつながりをどのように引き継いでいくか、また、それらを新しく生み出していかということ。こうしたことにつながる研究と現場での実践に取り組みたいです。

その際には、地域住民、学生、研究者など多様な方々と連携しながら進め、その成果を行政の施策にもつなげることができればと思っています。



ポルトガルの里山で調査をする深町さん（右端）

# 淡海 ヨシ紀行

～淡海の原風景を訪ねて



## 第7回 湖北(長浜市)

長浜市の市街地から湖北野鳥センターまでの湖岸には美しい風景が広がり、中でも湖中にヤナギ林が浮かぶように生育する奥の洲に沈む夕日は印象的で、撮影スポットとして人気を集めています。

『びわ町昔ばなし ふるさと近江伝承文化叢書』によると、かつて奥の洲にあった早崎の集落は正暦3(992)年の洪水で湖中に沈み、現在の場所(長浜市早崎町)へ移転したとのこと。また、この時の洪水で奥の洲にあった長浜市湖北町延勝寺のお堂が長浜市湖北町津里の野田沼に流され、津里の人々が神輿をしつらえて送り届けたとのこと、その縁から余呉川の「渡ん所」まで神輿をかついで祭を催した話が『湖北町昔ばなし』にあります。

これらの昔話は、氾濫や水位変動によって人々の苦勞が絶えなかったことを語ると同時に、姉川や余呉川から流れた土砂が堆積して遠浅となっていた状況を表しています。『近江長濱町史』には、寛文12(1672)年に彦根藩士の江坂清治郎らが新田開墾奉行となり、長浜町の葭地を開墾した記録が残り、周辺にはヨシ群落が多かったことがわかります。

明治13(1880)年に刊行された『滋賀県物産誌』には「葭」の生産量が掲載されており、東浅井郡八木浜村(現長浜市八木浜町)の生産量が1万5千束で、ヨシの一大生産地であった蒲生郡円山村(現近江八幡市円山町)の1万7千束

に匹敵しています。さらに注目すべきは、八木浜村で生産されたヨシの売先に「長浜」の名があることです。

長浜は湖北最大の町で、町家では簾や衝立にヨシが使用されていたと思われます。また、北相撲村(現長浜市相撲町)の成田重兵衛が江戸時代に刊行した『蚕絹綉大成』には、当時の養蚕の様子が描かれており、蚕座を置く吊り棚のうち、一番上にかけてあるのが葭簀でした。

長浜市湖北町田中に残る藤居家文書には、文政11年(1828)建造の主屋の屋根葺に使ったヨシの入手先として丸山村(現近江八幡市円山町)、富田村(現長浜市富田町)、白部村(現近江八幡市白王町)の名があります。湖北はヨシの生産地であると同時に一大消費地でもあったのです。

長浜市八木浜町に現存する中村家住宅は桁行22.8mの大規模民家で、国指定重要文化財に指定されています。八木浜町には他にも居住されている葭葺民家がいくつかあり、風格のある美しい街なみとともに、ヨシとともに歩んできた湖北の暮らしや営みの跡を今に伝えています。



中村家住宅  
(長浜市八木浜町)

## 滋賀県 地球温暖化防止 活動推進員 リレートーク



中尾 浩康さん  
大津市在住

今回は、普段は水と地域をつなぐ最前線で活躍され、専門的な知識をやさしくわかりやすく伝える力で、子どもから大人まで幅広い世代に語りかけるこの方です。

2006年(平成18年)から滋賀県地球温暖化防止活動推進員として約20年間活動していますが、5年程前までは、仕事の関係で関東から九州にある職場を2、3年毎の異動により、長年単身赴任生活をしていましたので、帰省したタイミングで啓発活動へ参加するしかありませんでした。

今ではショッピングモール等で開催される多くのイベントに参加することができ、温暖化防止に繋がる啓発活動が行っています。

私は、仕事柄、近年の気候変動による台風の

巨大化、豪雨、猛暑、干ばつ、森林火災などの気象災害の増加を痛感しています。このような災害も地球温暖化の影響とされています。

我々推進員が推進センターとともに、2050年の温室効果ガス排出量実質ゼロの滋賀県目標達成に向け、県民の皆様にお伝えすることが出来ればと思い、今後も温暖化防止活動を続けていきたいと考えています。



びわ湖の魚釣りゲームを通して  
子どもに環境保全を伝える中尾さん

地球温暖化防止活動推進員は、地球温暖化対策の推進に関する法律に基づき、知事から委嘱され、温暖化防止にかかる普及啓発が行われています。



## 「デコ活」ポスターコンクール表彰式・「デコ活」講演会を開催しました

11月29日(土)、大津市のコラボしが21において、今年で9回目となる地球温暖化防止「デコ活」ポスターコンクールの表彰式および「デコ活」講演会を開催しました。

「デコ活」とは、「脱炭素につながる新しい豊かな暮らしを創る国民運動」の愛称であり、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を減らす(DE)脱炭素(Decarbonization)と、環境に良いエコ(Eco)を含む「デコ」と活動・生活を組み合わせた新しい言葉です。

この「デコ活」を県民の皆さんに広めるために、ポスターを募集したところ、今年は677作品ものご応募をいただきました。たくさんのご応募、誠にありがとうございました。

表彰式では、14名の受賞者を表彰者や審査員、保護者や会場の皆さんとともに讃えました。また、会場には受賞作品が展示され、多くの来場者が熱心に作品を鑑賞されていました。

講演会では、気象予報士の正木 明さんに「迫りくる気候危機～私たちにできること～」をテーマにお話いただきました。近年の夏の異常な暑さを踏まえ、気象庁ホームページや天気アプリで最新情報を定期的に確認したり、地球温暖化防止のために家庭の電力を再エネプランに替えるなど、今私たちが取り組めることをユーモアを交えて分かりやすくお話していただきました。最後に「未来により環境を残さないといけない」と力強いメッセージを残され、講演会を締めくくられました。



受賞者の皆さん



「デコ活」ポスターコンクール  
最優秀賞知事賞受賞作品

東近江市立聖徳中学校3年  
縄田 彩々乃 さん

八日市駅前をモデルに「今、私たちにできる簡単な「デコ活」をこれからの生活の中で心がけ、このまちがよりよいものとなりますように」という願いが込められています。

## 第2回「淡海ヨシみらいフォーラム」を開催しました

2月27日(金)、大津市のコラボしが21において「淡海ヨシみらいフォーラム～ヨシ群落の保全とネイチャーポジティブ」を開催しました。

令和6年3月にヨシ群落の保全・活用・啓発・研究に取り組む多様な主体が情報交換と交流を図るため、「淡海ヨシのみらいを考える会議」を発足させました。今回のフォーラムは同年の10月以来第2回目の開催となりました。

第1部では、ヨシ群落の保全とネイチャーポジティブ(自然再興)の関係について、京都大学准教授の深町加津枝氏から話題提供をいただき、その後、当財団を含む4団体がヨシ群落と生物多様性に関する取組の発表と、県庁琵琶湖保全再生課からの情報提供がありました。第2部の情報交換会では、6団体がパネルやヨシ製品、チラシ等を展示し、会場各所で活発な交流が行われました。第3部では、龍谷大学教授の脇田健一氏をコーディネーターに迎え、深町氏をコメンテーターとして、会場一体となった意見交換が展開されました。

アンケートでは「ヨシについて理解が深まった」「有益な情報が得られた」「関係づくりにつながった」など好意的な声が多く、第1回の「連携の可能性」から、今回の「ネイチャーポジティブ」へと発展を感じるフォーラムとなりました。



## 「すすめ!!びわっこ探検隊 冬季プログラム」を開催しました

1月31日(土)、草津市下物町で「ラムサール条約登録湿地の琵琶湖を取り巻く自然環境の豊かさを体験しよう」をテーマに、すすめ!!びわっこ探検隊冬季プログラムを開催しました。

参加者の皆さんは、まず当財団ヨシ苗育成センターの圃場でヨシ刈り体験を行い、刈り取ったヨシでミニ丸立てを作りました。ヨシ刈りの作業中、巣立った後のオオヨシキリの巣を見つけました。日本野鳥の会滋賀のお二人の講師のご指導のもと観察し、ヨシ原の保全と鳥の営みが深く結びついていることを実際に見て学ぶ貴重な体験となりました。

ヨシ刈りの後は湖岸に移動し、フィールドスコープを使って水鳥の観察を行いました。参加者からは「水鳥の色の違いやクチバシの形の違いを観察することができて面白かった」などの感想をいただき、ラムサール条約登録湿地の琵琶湖の自然の豊かさを体感できた一日になりました。



## 淡海環境プラザ 館内クイズラリー開催中

淡海環境プラザでは、新たに館内クイズラリーが始まりました。展示を見ながらクイズに答えていくことで、下水道の仕組みや琵琶湖の水環境について楽しく学ぶことができます。

クイズは初級・中級・上級の3種類から選べます。環境問題について考えるきっかけとして、ぜひ挑戦してください。

また、矢橋帰帆島公園でも園内を巡って楽しむスタンプラリーが行われています。これに参加するとデジタル地域コミュニティ通貨1,500ビワコがもらえます。併せてご利用ください。

※淡海環境プラザは、土日祝日、年末年始等休館です。



## ご寄附金をいただきました(甲賀農業協同組合 様)

甲賀農業協同組合(JAこうか)様は、稲作や茶の生産が盛んな甲賀市および湖南市をエリアとして事業展開されている総合農協であり、環境こだわり農業の振興や地域の環境保全活動にも熱心に取り組まれています。

JAこうか様には、琵琶湖や周辺環境への負荷を軽減した農産物、火力を使わずに乾燥し生産した『JAこうかのお米 除湿乾燥 特別栽培米「キヌヒカリ」』の販売収益の一部を毎年寄附していただいております。

去る2月2日、当財団理事長の高木 浩文から感謝状を贈呈し、感謝の意をお伝えいたしました。



## 読者アンケートにご協力ください

この広報誌「あすの淡海」では、持続可能な社会の実現に向けた滋賀の環境保全の取り組みを発信しています。誌面をさらに充実させるため、このたび読者アンケートを実施します。

ご協力いただいた方の中から抽選で、ヨシを活用した当財団のオリジナル製品(2,000円相当)を進呈します。財団ホームページ掲載品の中から、好きな組み合わせをお選びいただけます。

皆さまのご意見を心からお待ちしております。

【回答方法】QRコード®

またはWEBフォームから



選べる製品の例  
左) 絵ハガキ「琵琶湖の魚 今森洋輔」(5枚入) ¥402(税込)  
右) 一筆箋「山口哲司」(1冊) ¥469(税込)

### 編集後記

今号では、琵琶湖岸で失われつつある自然と人との関わりを、もう一度結び直そうとする取り組みをご紹介します。自然を傷つけてきたのも人ですが、それを再生へと導けるのもまた人の営みです。びわ湖のヨシも、人の手で刈り、手入れを続けることにより健全な姿で次の世代に引き継ぐことができます。こうした実践は、自然と人との共生をめざす当財団の思いとも重なります。自然豊かな滋賀に暮らす私たちだからこそ、身近な自然に目を向け、ともに関わりませんか。

## あすの淡海 VOL. 53 | 2026 春号 (年4回発行)

発行



公益財団法人  
淡海環境保全財団

〒525-0066 滋賀県草津市矢橋町字帰帆2108番地  
TEL : 077-569-5301  
FAX : 077-569-5304  
E-mail : info@ohmi.or.jp

滋賀県地球温暖化防止活動推進センター

TEL : 077-569-5301 FAX : 077-569-5304  
E-mail : ondanka@ohmi.or.jp

淡海環境プラザ

TEL : 077-569-5306 FAX : 077-569-5334  
E-mail : plaza@ohmi.or.jp



- 用紙: 責任ある木質資源や再生資源を使用したFSC®認証用紙
- インキ: 環境配慮型インキ(植物油インキ or ノンVOCインキ)
- 印刷: 有害な廃液を排出しない水なし印刷